

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十五回）

けんしらぎし

## 遣新羅使と万葉集くその10く

く筑紫（九州）・神集島く

・天平八（西暦七三六）年に朝鮮半島にあった新羅国を目指す遣新羅使一行は、糸島半島（福岡県）の西に位置する「引津の亭（とまり）」（本シリーズ第五十四回）を出帆し、次いで引津亭から西航24キロ余で肥前（現・佐賀県）の唐津湾の入口にある「柏島の亭」に着き碇泊したのである。

・遣新羅使一行の筑紫（九州）への到着は山口県の「熊毛の浦」を出航して間もなく佐婆の海中（現防府市沖合・周防灘の海上）に差し掛かった時に逆風に遭い、船団は漂流し、一夜を過ごした後、幸いに順風を得て豊前国下毛郡の分間の浦（現・大分県中津市中津港付近）に到着したことが筑紫（九州）への第一歩となった。（本シリーズ第五十一回）

・ついで遣新羅使らの船は分間の浦から北上し、ようやく六月下旬（現在の八月上旬）に那の大津（博多湾内にあった港の一つといわれる。）に入港し、現在、福岡市内中央にある福岡城跡地にあった筑紫館（外国からの使節の接待、宿泊させる迎賓館であり、また遣新羅使たちの旅支度をすすめる対外公館であった。）に滞在した。

・その後、次の碇泊地を目指し福岡湾内にあった那の大津から出航したが、間もなく台風が発生した為か同じ福岡湾内西北に位置する糸島半島突端

に近い「韓亭からとまり（現・福岡市西区宮浦・唐泊）」に風待ちで仮泊し、次いで糸島半島に沿って西にある引津亭ひきつのとまり（現・福岡県糸島市志摩町引津湾の説。）に碇泊し、その後、一行は西航約二十四キロ離れた筑紫（九州）での最後の碇泊地となる肥前国松浦郡狛島亭（いましまのとまり）に向けて出航してる。

・「肥前国松浦郡狛島」〔「狛島」の「狛」は古本では「柏かしわ」の誤写で「柏島」であり現在の佐賀県唐津市の「神集島かしわじま」であるとの説が多くある。

「神集島」は佐賀県北西部の東松浦半島と福岡県西部の糸島半島に囲まれた唐津湾の入口部の海に浮かぶ周囲七・二キロメートル、面積約一・四キロ平方メートルの小さな島である。西側の湾は古代の要港だった。

「神集島（唐津市）」という名は、「松浦古事記」には、この島で神功皇后が三韓征伐の時、この島を訪れ戦勝祈願のため軍神たちを集めたという故事に因みつけられた島名と伝えられる。

・万葉集には「柏島（現・神集島）」に碇泊中に次の題詞で遣新羅使人たちが詠っている歌が収められている。

「肥前国の松浦郡の狛島の亭いましに船泊ふねはてしてし夜、遙かに海の波を望み、各々旅の心を働いたみて作る歌七首」のうち次の故郷を想う歌二首がある。

1) 帰り来て 見むと思ひし 我が

やど すすき

屋外の 秋萩薄散りにけむかも

(解説) 順調に旅が進んでいたら、無事に帰って来て見ようと思った、わが家の秋萩やススキは、もう散ってしまったらうか。

・これからいよいよ壱岐・対馬に向かって、玄海の荒波に漕ぎだそうとする不安を胸に詠んだ歌であろう。

たらしひめ みふねは

2) 足姫 御船泊てけむ 松浦の海  
妹が待つべき 月は経につつ

卷十五—3685 作者…遣新羅使

(解説) その昔 足姫(神功皇后)の御船が泊ったという松浦(まつら)の海で 船泊りは続いて妻に帰ると告げた月は いたづらに過ぎてゆく、妻の思いをよそに松浦(まつら)での船泊りは続く。

・右記1) 2)に詠われている「帰国の予定時期」については遣新羅使人们が新羅に向かって難波(大阪湾)を出航する前に妻との贈答歌だろうと思われる夫の答歌と思われる歌が卷十五—3586にある。

「我が故に 思ひな瘦せそ 秋風の 吹かむその  
月 逢はむものゆえ」が詠われている。

・歌意は私のために物思いをして瘦せないでおくれ、秋風の吹くその月に帰って来て逢うのだから。と秋までには帰るべき月も過ぎてしまつて妻たちは待ちこがれているだろうなと思う気持ちが込められている歌である。

〔参考文献〕 林田正男著「万葉の歌」、日本古典大系「万葉集四」筑紫豊著・九州万葉散策 他

（写生地）

唐津市街地から国道二〇四号線北西約八キロにある唐津市湊地区の沿岸部から島形が唐津湾の入口に横長く浮かんでいることから「軍艦島」とも呼ばれている「神集島」と前面に湊の海岸に立つ唐津市の天然記念物に指定されている奇岩「立神岩」を描く。（杏花）



## 「神集島位置図」

「神集島」は東松浦半島・唐津市の「湊」から沖合一キロメートルの玄界灘に位置する。

